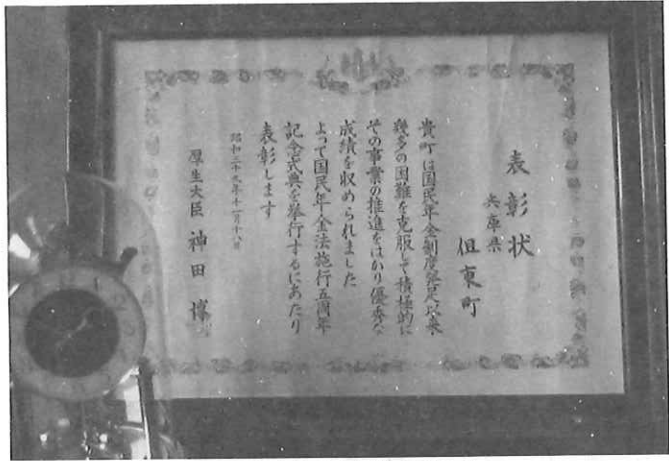


第六章 但東町の成立とその二〇年史



国民年金優秀表彰状と記念品

町各機関の広報紙 (広報たんとうは月刊・他は季刊)
農協たんとう



第一節 但東町の成立

一、三村合併と但東町の生誕

1、町村合併促進法と合併論

昭和二八年「広川弘禪が農相を罷免」されたり「バカヤロー解散」があったりして、政治経済にも波乱の多い年であったが、九月「町村合併促進法」が公布され、戦後の交通通信の発達、広汎経済時代に即応するため全国的に町村合併が進められることになった。これを受けて兵庫県でも二九年一月から合併計画案による北但各町村長・議長への説明が行われた。このように町村合併は上から計画され、合橋・高橋・資母の出石郡奥三村の合併案は、北但地方事務所長から各町村へ示された。

従来市町村の区域の問題は住民の利害関係が深くからんでおり、旧町村制でも「町村の区域は従来の区域による」としてその積極的な変更をさけてきた。しかし封建制の解体、近代国家の成立は、地域の封鎖性による解体し交通通信・マスコミの発達等は一部の山村を除いて人々の生活圏を拡げ、従来と比較にならない広い地域に亘って日常生活が行われるようになってきた。反面地方公共団体の任務も、従来の狭い地域の教育・道路・産業・生活行政から、近代的な公営企業、社会福祉事業、文化事業を行うことが必要となり、その財政的な基礎は合併等により社会資本を集合し、広域住民の利用の途を拓くことによってそれが可能となる事

業が増してきた。これが戦後自治庁が、合併によって市町村財政の増強と地方自治行政の改善を図ろうとする合併法の目的であった。しかしこの理論は平坦部の集落には適合されたが、谷の経済に支配されている山村等には、問題も残されていた。しかし弱少町村乱立でなくより大きな集会的財政規模による広域行政なしに近代的社会生活を享有し得ない状況から、全国画一的に合併が進められた。

したがって合併の必要性については「往古から人情・風俗及び生活状況も共通点多く、地理的にも接近し」とのべられているが、但東町の母体となつた旧三村は、いずれも狭い谷の経済を形成しており、従来の生活圏はそれぞれ谷に分断されていた。したがって町村合併の長所としては、広域行政を行うことにより、集合した財政規模で近代的な行政を行う点が強調された反面、その短所としては細い住民の生活に関する人情的な行政サービスが行われなくなり、画一的官僚的な窓口行政に変わる危険が指摘された。また合併は行政の合理化にはなるが、従来の村役場を中心とした集落は淋れ、新庁舎の周辺に新しい町の中心ができることは明らかである。この意味で庁舎の位置の問題は合併の条件として、各村の主張の中心となつた。また当時「村」よりも「町」、「町」よりも「市」の名の方が住民の住所呼称の際「聞えがよい」といつた見栄のよいうなものもあつた。現在全国には県内唯一の村とし稀少性が尊重されている例もあるが、当時は村から町への呼称の変更は一種の格上げと思われていたのである。

2、合併経過

北但地方事務所からの指示による第一回の合併研究委員会は、昭和二九年一月二日合橋村役場で開催された。しかしやはり庁舎の位置について意見がまとまらず、更に三〇年四月の村長・議会議員選挙後も、合

併研究委員会、小委員会ともまとまらず進展をみなかった。翌三一年五月一日合併促進委員会に切替え協議を進めたがなお庁舎問題で一致を見なかった。庁舎問題の各村の主張は次のようであった。

旧資母村は新合併による予想住民数九千人中、中山を中心とする六キロ以内に四、六〇〇人が住んでいることから中山を主張。旧高橋村は現在の出合を、旧合橋村は出合・唐川・小谷のいづれかとする事等であった。このため県に調整を一任した。かくて八月二二日、

一、新町の庁舎の位置は、旧合橋村出合付近とし、新町において決定する。

一、新町の仮庁舎は暫定的に旧資母村役場とする。

一、三カ村の議会議員の任期は、新町発足後一カ年延長する。

の調停案が示され、これが説明会、懇談会を開催し多数の賛成を得たので昭和三一年九月一五日各村一斉に村議会を開催して提案し、満場一致で合併案を議決した。関係各村の賛否の状況は下のようであった。

合併後の新しい町名も重要な問題であるので新町名を一般住民から募集することになった。資母地区で多かったのは「吉野」「東但」「東」「但馬」であり、合橋・高橋両村では「三和」が新町名として圧倒的に多かった。これらを三村議会で協議した。応募総数七二一、その町名の種類は一七〇もあった。そのうち各村毎に五町名を選定し、合併促進協議会で、但馬の東端にあり、他にもない町名で、文字も平易で読み違いも起らない

合併による旧村民の賛否の割合 (%)

村 別	賛 成	反 対	意見なし
合橋村	70	10	20
高橋村	60	20	20
資母村	50	40	10
平 均	60	23	17

等の理由で「但東町」と決定され、新町が発足することになり、九月三〇日官報号外で告示された。

町村の廃置分合

地方自治法第七条第一項の規定により、兵庫県出石郡合橋村、高橋村及び資母村を廃し、その区域をもって但東町を置く旨、兵庫県知事から届出があつた。

右の廃置分合は、昭和三十一年九月三十日からその効力を生ずるものとする。

昭和三十一年九月三十日

内閣総理大臣 鳩山一郎

二、合併直後の紛争と新町発足

このように新町の発足は三〇年八月二一日の兵庫県の調停案提示後順調に進み、九月一五日各村議会の合併議決、九月三〇日の合併告示によつて新町として発足したが、多くの問題は新町発足後に譲られた。前述新庁舎の位置、議会議員の任期延長の他、教育委員等の任期、小・中学校の通学区、町税の賦課率、一部事務組合の取扱、支所事務、一般職員の身分等は、そのまま引継ぐこととし、農業委員の新町の定員は五人とし、九月二九日の次の改選まで在任する。負債の処分等はそれぞれ新町が引継ぐが、償還財源等は地元で負担する。消防団統合は速やかに協議して定める等であつた。

九月三〇日発足した新町は、新町長職務執行者に宮島藤一（旧合橋村長）を決め、十一月三日町長選挙を行い、初代町長西本高志を選出、役場は資母村中山の旧資母村役場におき旧合橋・高橋の役場を支所として発足した。旧村からの一般職々員は合橋一三人、高橋一〇人、資母一四人計三七人で、初代議会議長は井上律郎が就任した。

このようにして漸く新町政が発足したが、町民も職員も尚新町による生新の気運は生れなかった。昭和三年一月二七日合併後の最初の町議会で、合橋・高橋地区議員は「役場の位置を出合市場付近に変更する条例」等を提出。資母地区議員がこれを不満として退場したあと議決してしまった。

このため紛糾し町三役及び議会役員問題がからんできた。この対策として知事は二月一五日、問題を町村合併調整委員の調停に付した。

兵庫県の調停委員はこれにより現地調査のため来町、町当局をはじめ合橋・高橋地区代表者、資母地区代表者の意見を聴取し、町政正常化のため次の措置を町当局にとるよう要請した。即ちさきの議決された庁舎位置条例を取り消し、町人事を是正するよう要望し、資母地区に対しては庁舎位置は永久に資母に置くものではないことを了承して町政に協力することを要望した。さらに同月二七日関係者の上臈を求め意見の調整を図ったが、両者の協調が得られなかったので、同日つぎの調停案を示してその受諾を勧告した。

勧告書

出石郡但東町長 西本高志

資母地区代表者 今井敏郎

昭和三十一年九月三十日設置された但東町の合併に伴う同町役場位置に関する争論について、昭和三十一年十二月十五日兵庫県知事から、同事件を新市町村建設促進法第二十六条第一項の規定による調停に付されたので、慎重に調査審理の結果同法同条同項の規定により、当事者双方に対して左記調停案を受諾するよう勧告する。

追って、昭和三十二年一月六日までに右調停案を受諾する旨の文書が提出されなるとき又は、調停案を受諾した後、昭和三十一年一月二十日までに調停案第一項記載の処置が履行されなときは、調停を拒否したものとみなす。

昭和三十一年十二月二十七日

兵庫県町村合併調整委員

真鍋又治郎 印

俵 静夫 印

小谷 守 印

調停案

一、主文

- (一)但東町役場位置に関する条例は、直ちにこれを廃止する処置を講ずること。
- (二)資母地区住民は、良識と誠意をもって今後一切の町行政に積極的な協力をする事。
- (三)但東町役場の位置は、昭和三十一年十月一日以降同年十一月三十日までの間において、同町出合

附近に決定し、速やかに移転の処置を講ずること。

(四)前項の移転が完了するまでは、暫定的に現在の同町役場を使用すること。

この調停案に対して資母地区は、昭和三二年一月四日調停案を受諾したが、町当局においては意見がまとまらず、回答期限の延期の申し入れあり、更にこの案の内容について疑義を申し出たので真鍋委員長が現地へ赴き関係者に対して内容を説明した結果、昭和三二年一月二九日調停案第一項を受諾する旨の文書の提出があり、続いて同年三月一五日全面的に受諾した。

しかしその後、調停案の履行をめぐる意見が対立し、人事問題の争いも加って事態が紛糾したので、県の野本地方課長及び真鍋委員長がそれぞれ現地調停を行つたが解決せず、結局三二年九月二一日再び町議会において役場位置改正条例を合橋・高橋地区議員により一方的に議決し、翌二二日公布してしまつた。

県は直ちに町長に対して役場の移転を中止するよう要望するとともに、同年九月三〇日更に調整委員会を開き、町長及び町議員全員に対し、二一日議決された役場位置条例の是正措置を強く要望し、更に同年一月四日関係者に対して次の実施に関する覚書に基づいて措置するよう要請した。

調停案の実施に関する覚書

但東町役場の位置に関する争論に関してこのまま推移するときは、新町の円満かつ一体的な建設發展を阻害し、住民の福祉増進を著るしく損うに至るの実情にあり、現状のまま放置することは、但東町住民一般に胚胎する愛町精神に背馳することとなるのを深く憂慮し、この際、相互理解の下に誠意と良識をもって相共に協力して事態の急速、かつ、円満なる収拾を図るため、左記の事項をここに確

約し、その実現を期するものとする。

記

一、調停案の趣旨に基き、町長は速やかに町議会を招集すること。

二、会期の第一日は、町議会において議長を選挙し、議会運営の正常化を期すること。この場合の議長は資母地区の議員のうちから選出するものとする。

三、会期の第二日は、町議会において但東町役場位置に関する条例（昭和三十二年町条例第三十八号）の廃止を議決し、町長はその翌日これを公布施行するものとし、役場は直ちに中山八一五番地旧資母村役場に移転の処置を講ずること。

なお、町議会は、但東町役場庁舎建築委員を選挙し、庁舎建築に伴う候補地の選定案の準備事項の審議に当ること。

四、会期の第三日以降は休会に入るものとする。

五、会期の終期は十一月末日までとし、会期の最終日に町議会は、但東町役場の位置に関する新規制定条例を議決し、町長は即日公布するものとする。この場合の同条例の施行期日は、庁舎建築に要する期間を考慮し、公布の日から八カ月を経過した日と定めること。

この覚書に従って手続きが取り進められたが、同年一月二十九日調停案に基く役場位置条例案が議会において否決され、解決は再び暗礁に乗りあげた。そこで調整委員はあらためて本問題の調停を行うこととなり、一月一六日再びつぎのとおり調停案の受諾を申入れた。

勧告書

但東町長 西本高志

資母地区代表者 永井加多次

但東町の役場位置に関する争論については、新市町村建設促進法第二十六条第一項の規定に基き、知事から昭和三十一年十二月十五日、調整委員の調停に付されたので、爾來慎重な審議の結果、同条第三項の規定により同十二月二十七日、調停案の受諾勧告を行ったが、本年三月十五日に当事者の受諾があり、さらに十一月四日は、当事者双方において調停案の実施に関する覚書及びその実施細目が交換されるに至り、関係者の筆舌に盡し難い努力により、その完全な履行が期待されたのであるが、同月二十九日の町議会において、調停案に基く役場位置条例（新規制定）案が否決されるという不測の結果をみ、調停案の誠実な実施が不可能になるに立ち至った。

かかる事態は、信義誠実の原則に背馳することは論をまたないところであつて現状のまま推移するときは、新町建設計画の実施がその軌に乗らず、新町の円満かつ健全發展は完全に阻止され、新町の一体性が損われることは火をみるよりも明らかで住民の不幸は計り知れないものがある。

そこで本委員は、この事態を深く憂慮し、この新事態に立脚して大局の見地から本件の円満かつ急速な解決取拾を図り、もつて但東町の建設を促進するため、委員全員一致の意見をもつて、あらためて同条同項の規定により別紙調停案を受諾するよう勧告する。

おつてこの調停案は、最終的なものであり昭和三十二年十二月二十一日までに右調停案を受諾する

旨の文書が提出されないときは、調停は拒否されたものとみなす。

昭和三十二年十二月十六日

兵庫県町村合併調整委員

委員長 真鍋又治郎 ㊟

委員 俵 静 夫 ㊟

委員 小谷 守 ㊟

(別紙)

調 停 案

一、但東町役場の位置は、速かに同町出合附近に決定の上、役場位置に関する条例を制定公布し、移転の措置を講ずること。

二、但東町は住民福祉の増進に資する諸般の建設事業に関し、充分な配慮をすること。

右の調停案は昭和三十二年二月二一日町当局及び資母地区代表がそれぞれ受諾したので調停は成立した。

しかし、庁舎建築予算について再び意見が対立し、町長は庁舎建築の入札を行う等庁舎の建築を早期に実現しようとし、庁舎建築に関する更正予算(特別寄付金)を二月二二日の町議会に提出、議決された。

このためかねて庁舎の位置と建築について全面的に協力するよう調停案を呑んできた旧資母地区の人々は、大いに激昂し、区民大会を開き「分町して独立の村政を行う」旨の決議を行った。

これらの調停と紛争解決に努力した長老、中野利雄(旧資母村助役・昭和四〇年歿)は、その手記でこの

間の事情を次のようにメモしている。

昭和三三年七月二日町議・元村議・里長・協議会・実行委員等の連合集会を開き、議員の辞職に至る迄の経過を報告、伊崎浅次を座長として「分町か、町政非協力か、資母地区発展のための条件で妥結するか」を協議した。その結果分町より他なしと意見一致、直ちに区民大会を開くこととした。

七月三日午後三時中学校講堂において区民大会、出席者約一、五〇〇人、議長団を選出、森脇議員の議会報告、堀正の六月二九日庁舎入札当日の状況報告、分町か、県調整委員会案（七月一二日県で開催予定）を呑むかを討議す。賛否の結果分町賛成者多数につき分町に踏み切り「分町宣言決議案」朗読拍手で決定し散会。

しかし同年一〇月一八日長老等の全体委員会で1、町長・議員の辞職を実現する。2、支所（資母）の強化と永久存置を覚書で明かにし、和平解決に同意し、分町問題は解消することとなった。

なお資母地区では「町政紛争に関する処理経過報告」が文書で配布された。

以上が庁舎問題の経緯である。

県は町長に対して建築の着手を見合わせよう要望するとともに、昭和三三年七月一二日調整委員会議を開いて町長及び議会議員に対してその責任を追及し、収拾策について回答を求めたところ同月一五日町長から遺憾の意を表し、庁舎建築費を圧縮して建設事業に充当する旨の回答あり、円満に解決するかにみえたが、両地区の感情的対立は強く、ことごとくに紛糾し、県は再三再四現地あつせんを行い両地区の和解を図ったが全面的な了解点に達することができず町政は全く麻ひ状態となった。なおこの頃美方町・和田山町堀畑地区

も合併時の紛争が起っていた。（「朝日」北兵庫版三三・九・一三）

しかし昭和三四年七月三日町政円満化のため町長が退職したため、地区間の感情的対立は一切解消し長期にわたる紛争は終結した。

以上は合併後旧村議会議員がそのまま新町の議員となり、多数決による議決で三村合併後の協調を得られないまま庁舎問題が独走した苦い経験を物語るものと考えられる。かくて昭和三四年七月三日初代町長西本高志は辞職し、二代町長永井幸彦の時代を迎えることになるが、町村合併という大事業の混乱の中に処して、新町発足の諸事業を遂行し、その基礎を築いた初代町長の苦勞と功績は、昭和四一年九月の町制一〇周年式典で、自治功勞者として表彰されたことでも知られる。

町制一〇周年記念制定

但東町民歌

作詞 橋本いはを
補詞 今井広史
作曲 橋本喬雄

一、永久の調べを 奏でゆく	二、めぐる山なみ 陽に映えて	三、自治の旗風 さわやかに
谷の流れの 水澄みて	いのち溢る、 生産の	夢もほほえむ 人の和に
めぐみ豊かに 花ひらく	歌も雄々しく 湧きあがる	たのし希望の 虹が立つ
ふるさと但東 文化の町	ふるさと但東 力の町	ふるさと但東 平和の町
結ぶわれらの この手から	流すわれらの この汗で	こぞるわれらの この意気で
きょうのしあわせ 招こうよ	あすの栄えを 築こうよ	ゆくて新たに 拓こうよ

第二節 但東町二〇年の歩み

一、西本町長時代

昭和三年九月三〇日但東町が成立し、初代町長に、西本高志が就任した。以来、紛糾を極めた前述庁舎問題も漸く解決し、新町は次のような建設の基本方針で発足した。

1 産業経済の振興並に郷土の保全

- (1) 耕種農業・畜産及び養蚕業を一連とする総合営農の拡充強化
- (2) 林野の利用開発、並に森林産物の改良
- (3) 治山・治水・利用事業の推進
- (4) 牧野管理の適正及び緑化の推進
- (5) 中小商工業特に絹織物工業の振興助長
- (6) 余剰労力の合理的消化方策の具現

2 教育保健施設等の整備並に振興

- (1) 教育施設の整備及び拡充
- (2) 健康保険制度の実施及び診療施設の整備

- (3) 水防・消防施設の整備
- (4) 生活改善の実践

3 道路・交通・通信施設の整備拡充

- (1) 主要県道の改修促進と町村道の改修
- (2) 定期バスの運行路線の拡充と運行回数増加
- (3) 通信施設の整備拡充

とくに庁舎問題の紛糾の中で県道天谷線の改良工事を竣工させ、新町の道路整備行政の先鞭をつけた事が注目される。

なお合併による新町の人口は、九、六九〇人で、戸数は次表のように一、八七三戸となった。

状 況	戸 数		人 口		区 別		現 在		
	連 たん 戸 数 (戸)	戸 数 (戸)	官 報 公 示	現 在	昭三一・九・三〇現在	(昭三二・二)			
全戸数に対する割合(%)	五・一	三〇	三、三五	三、三〇	合橋村	高橋村	資母村	計	八、九六六
	五・四	二七〇	二、四一	二、四四					八、八〇四
	六・六	四七	三、四一	三、九六					八、九六六
	五・九	一、〇六	九、六七	九、六九〇					八、九六六
	六・六	一一三	一、八七三	一、八七三					一、八七三

昭和三十三年九月新庁舎も出合一四四番地に建設され、自らの新町の新しい中心ができた。いまこの新庁舎から、町内各部落への距離を見れば次表のようである。

各部落から新町役場までの距離 (杆)

天谷	西谷	河本	日殿	出合市場	奥尾根	矢根	水石	畑	部落名	距離
六八五	五八五	四八五	二七〇	一九〇	四七〇	二六五	六一五	六八〇	佐々木	五五
平田	正法寺	唐川	三原	出合	南尾	小谷	相田	二三五	栗尾	六四〇
四二〇	二五〇	二三五	八〇	〇	四〇	一一〇	二三五	六五	赤野	八二一
如布	薬王寺	大河内	小坂	東中	後	久畑	佐田	六	日向	五五一
七七四	一〇九〇	一〇九〇	一〇八〇	九九〇	九八〇	八八〇	七七〇	四〇	日向	五五一
畑山	坂津	赤花	奥赤	奥藤	中藤	口藤	虫生	八二一	日向	五五一
六八〇	一〇五五	一〇四一	一三九九	一二七九	一一六二	一〇四五	九三六	二二	日向	五五一
		坂野	高竜寺	西野々	太田	木村	東里	日向	日向	五五一
		九三六	五九四	四七九	四二二	三七七	五七九	五五一	日向	五五一

なお合併以後進められた主な事業は次表のようである。

事業名	数量・坪数	事業に要した経費 (千円)
-----	-------	------------------

第二節 但東町二十年の歩み

またこれらの事業を遂行するための新町成立以後三六年までの財政の推移及び負債の状況をみれば次表の通りである。

財政の推移

(単位 千円)

造	林	ハ三ヘクタール	六、四四
新農村建設	〃		八、〇五
共同電話架設	〃		五、四〇〇
簡易水道布設事業	給水人口一、三六六人		一五、五五
消防自動車(四輪)購入	二台		三、八〇〇
「子午線の塔」建設と記念	〃		一、〇〇〇
〃 校庭拡張	〃	三、〇〇〇	一、七四
小中学校新改築	〃	七五七平方メートル	七、〇六
行政施設建築事業	〃	七七平方メートルほか	一〇、八〇〇
自動車購入	二台		一、六〇〇
庁舎、附属建物建築事業	七五七平方メートル		七、五〇〇

(千円)

年度	区分	才	入	才	出	差引残額	備	考
----	----	---	---	---	---	------	---	---

負債の状況

(注) (一) は一般会計
(特) は特別会計
を示す。

(昭三・二・一現在)

区 分	借入年度	借入金額 (千円)	未償還額 (千円)	借入先
義務教育施設整備事業	昭三・三四	二、〇〇〇	一、八七八	大蔵省
庁舎等単独事業	三三	四、〇〇〇	三、七〇二	〃
都市計画等補助事業	三三・三五	二、九〇〇	二、八八六	〃
災害復旧事業	三三・三六	六、九〇〇	六、五〇〇	〃
簡易水道等準公営事業	三一・三五	六、七〇〇	六、五〇七	郵政省
病院・住宅及び厚生施設事業	三五	一、〇〇〇	一、〇〇〇	大蔵省

昭和三十一年度	(特) 一八、一四六	一八、一四六	〇	
〃 三二	(特) 三九、七五七	三九、七五七	一、〇五五	
〃 三三	(特) 五〇、五九六	五〇、五九六	一、七五二	
〃 三四	(特) 六、五五九	六、五五九	〇	
〃 三五	(特) 一〇、八六六	一〇、八六六	〇	
〃 三六	(特) 二六、〇〇七	二六、〇〇七	〇	予算額

一、永井町長時代

1、主な事業と出来事

昭和三〇年に入ると日本の経済は漸く戦後の回復から立直り、国の経済白書自体も「も早戦後でない」とのべ、食糧や農業生産をはじめ、産業経済の各指標も、戦前の昭和九年―一一年の平均を上廻るようになって。全国でも新市の誕生、町村合併による大型町村の再出発、小中学校校舎、町村役場庁舎の新築等、地方財政の設備投資も増大し、日本経済はこの頃からいわゆる高度成長期に入るようになったといわれた。この頃の但東町の農村経済の変化を示すものに、田植えの人手不足のため美方郡温泉町切畑辺りから「早乙女」の移動労力を受入れた事でも知られる。昭和三四年六月の田植えには、温泉町の倉田豊子（一九）等一行八人が、豊岡から田植移動労力の第一陣として但東町に入り、資母地区で田植を行った。田植え労賃稼ぎ三―五年の経験者揃いで一日一〇アールを植えるが、ワンピース・ハイヒールに豊岡特産ビニール靴といった姿であった事を当時の新聞が伝えていた。（「毎日」三四・六・二）

昭和三四年七月三日、初代西本町長辞任のあとを受け、七月二三日永井幸彦が選ばれて二代の町長に就任した。新町長はその就任の弁で「但東町は発足以来紛争相次ぎ、合併の基礎はなつたがなお町勢の発展について考える余裕がなかった。このため町政発展の基礎を町民の「和」に置くと共に、町民各位の協力により積極的に町勢の振興を図るための諸策を進めてゆきたい」と語った。（町広報一号）

このためまず町政振興の基礎となる「但東町産業振興調査」を完成せしめた。この調査は昭和三三年但東

町が新農山漁村建設総合計画事業実施の指定を受けた事にはじまり、町内外の振興調査委員の協力により、この際但東町百年の計を樹立しようとするにあつた。町内では合併直後の有識者を集めて会議を重ね、町外では町出身の宮出秀雄（当時中央大学講師、参議院農林委員会調査員）の協力を得、中央大学学生等の現地調査等を経て昭和三四年一〇月完成した。この調査は合併後の但東町の科学的な産業経済調査に基く基礎的な調査で、A五版二八七頁に亘る報告書にまとめられ、その主な概要は次の諸点にあつた。

- 1、但東町は交通不便の山村のような先入観があるが、交通立地は道路計画等により改めうること。
- 2、山ばかりで資源に恵まれない僻地のように思われているが、一万町歩に亘る山も雪も雨も、産業振興に活用しうる資源であること。
- 3、分収造林等により千八百町歩の植林を行えば年七万七千石の輪伐を行い得、薪炭・パルプ材等の輪伐計画と共に山村経済を恒久的に安定せしめうる。
- 4、畜産も山の資源を活用し、従来の和牛から乳牛に転換し、資本の回転の早い酪農、養鶏等を中心すると共に、大規模な肉牛の多頭飼育を行なうこと。
- 5、交通立地を改めるため、各谷の道路を整備し、峠は林道で結び、主要幹線はもちろん町内循環道路網を完成すべきである。
- 6、縮緬等の機業は貸織型態から脱却し、精練場を設け万難を排して自営産業に発展せしむべきである。
- 7、町財政の合理化のためにも思い切つた学校統合を断行すべきである。
- 8、農業は資本集約的な企業的経営を育成し商的農産物の大量生産と有利な共販体制を確立すること。こ

のため農協の発展を図ることが必要である等を指摘したものであった。

昭和三五年一月から「但東町広報」が毎月発行されることとなり、九月には町章が公募により制定された。またこの年一九六〇年の「世界農業センサス」が行われ、但東町の総農家戸数一六七七戸、農家人口九〇四八人、耕地総面積二〇三六町歩、専業農家一、〇五五戸、一種兼業四八〇戸、二種兼業一三八戸、肉用和牛一、二五二頭、桑園が一三四町歩ある事等が明らかにされた。

また一〇月に行われた国勢調査では、但東町の世帯数は一、八一九、人口は八、八〇四人となった。その他町連合青年団が発足し、若者として団結を示した。また全区に電話が開通し、豊岡病院高橋診療所が竣工した。

昭和三六年三月には但東町婦人会が発足、会長には森井みよ子が選任された。またこの月東床尾山一帯が自然公園に指定され、但東町も自然公園をもつこととなった。また町民集会所の竣工に次いで日本標準時制定七五周年を記念して、中山に「子午線塔」が建設された。また新法による商工会が発足し、初代会長に渡辺光司[※]が就任した。この人は昭和二年二才の時たった一台の織機から始めた機業家で、その当時中山を中心とする同業者は三〇戸であった。町議や町消防団長をも務めた親分肌の人で、「但馬縮緬」といっても西陣の賃織りで、半農半機（ばた）が多いだけに止むを得ないが、昔通り但馬人の作っている縮緬には『但馬縮緬』のレッテルを貼りたい。零細機業は零細機業なりに組織を整備し、県下の特産としてますます味のある織物をつくるという但馬縮緬の王政復古を念願としたい」と神戸新聞の記者に語っている。（「神戸新聞」二九

・三・一八）※昭和四六年歿五等瑞宝章叙勲・本名は光治

またこの年の九月第二室戸台風の米襲あり、但東町もかなりの被害を出し、それが復旧作業に当った。

昭和三七年一月、各支所に分れていた戸籍事務を本庁に統一し、但東町も本庁に四課を置く事になった。

また産業振興調査に即して各区に産業振興委員をおくこととなった。この年県より但馬織物協同組合の企業診断があり、診断結果と勧告が発表された。但東町の機業に組織的体系的な企業診断が行われたのは初めてのことで、その概要は次のようである。診断員は兵庫県那波工業課長他七名で、但東町を中心とした但馬絹人絹織物工業の現況を1、「出機」「賃加工」への移行が顕著で、自立の基礎を欠いている。2、優秀力織機を装備しているが、高級織物の受入不能、生産率の低い点が問題。3、共用整経機、親工場依存が多く、生産増強の隘路となっている。4、交通の便が悪く運輸の点で不利があり工夫を要する。5、零細経営が多く、組合統制力が弱い、等を挙げていた。農業との結びつき、農業経済の安定に貢献している利点は大きい。昔から工業としては発展せず、西陣等「しにせ」の下請、賃加工の域を脱していない。(九〇%以上が賃織業者)しかし製品については熱心・誠実で、手抜きを行わず「親切」な仕上げを特徴としている。経験年数も二〇年以上のものが多く、この当時三〇年以上の経験をもつ工場が一割近くあった。これら診断による振興対策としては、

- 1、技術指導強化による製品の質的向上
- 2、企業の系列強化
- 3、設備とくに共同設備の近代化
- 4、組事業の強化

5、製品・原糸輸送の近代化合理化

6、新製品の創出

7、若人の奮起による自立経営への指向

等を挙げ、結びとして長期の積極的対策の樹立実行を強調していた事が注目された。

またこの年の六月米花稔・神戸大学教授等県の工場適地調査団が来町、工場適地調査が実施され、他の町村と共にその調査結果が発表された。県からの調査の多い年であった。九月には第四五回町議会が開かれ、従来の議員の法定定員が二二人であったのを二〇人とすることが決った。

新しい町の発足と共に、町内の新しい農業も漸く若い人々によつて試みられるようになった。例えば酪農部門では産業振興計画に従つて相田には一人協業、二一頭の乳牛を飼養する「総和農場」、西野々には四人協業で一二頭の乳牛を飼養する「明和農場」も生れ、町も高橋・合橋地区に二〇頭の乳牛を静岡県から導入して酪農振興のきっかけを作った。このためこの年の秋には、まず乳牛導入百頭祭が行われた。五月―六月頃に乳牛飼養戸数は四二戸、頭数九三頭となり、毎日の生乳出荷量も六五〇kgを超えるようになった。昔から和牛飼育の伝統的な技術があり、山草も多いので成牛二頭で月一、四〇〇kgの搾乳が行われ、この当時既に月四万五千円程度の収入を得られるようになった。現在素牛の価格が一四万円から血統牛になると一七―八万円もするので、近代化資金や共同化資金の利子補給等が要望された。これらの実績を踏まえ町酪農振興会では向後五カ年に千頭位にしたいものと意気込んでいる状況となった。（「神戸」三七・五・一六）

また合橋の野尻区の大石実、阪岡良雄、堀江敏雄、堀江勇夫の四人は赤坂にある畑部落の共有林二・六五

haを借りて開墾し桑園に仕立て、その中央に一〇〇㎡の蚕室と三〇㎡の上簇兼貯桑室を建て、屋外条桑育の手法をとり入れて協業経営に乗り出した。桑の育ちもよく一〇a当り平均一一・五kgと、従来より二倍の収繭は確実と出石蚕業指導所は折紙をつけており、戦後養蚕の衰微の折柄、但東町内のこの新しい協業養蚕の出現が期待されるようになった。(「神戸」三七・六・五)

昭和三八年四月但東町老人会が発足、初代の会長に佐古弥之助が選ばれた。

またこの年は町議会議員、農業委員会委員の改選で町長選挙等が行われ、永井町長の再選が決った。赤花小学校・中藤の団体電話・坂津地区の簡易水道・資母保育園等町内の各種施設が完成をみたし、一〇月には口藤子供会が県知事から「のじぎく賞」をおくられた。

農業の面では四月資母農協の共同育雛所が竣工した。工費一、三〇〇万円で虫生に完成し、合併後盛んとなった養鶏熱による大型養鶏のセンターとしての役割を果たすことになった。この施設は浜坂町や福知山市から導入した初生雛をここで一二〇日間育て、毎月二千羽を配給しうるよう常時八千羽を保育しうる施設となっている。一二〇日雛(成鶏)として一羽この当時で五三〇円で配布しうることになっており、調整用に浜坂町からなお二、五〇〇羽程度購入することとなった。また秋には鶏糞乾燥機、スチームクリナー等を増設することとなった。(「神戸」三八・八・八・一一)

また但東町のチューリップ栽培は、雪国ではバイラスの少い利点等を活用し、水田裏作として栽培できることから、新潟・富山等の先進地に倣って導入されたもので、但馬地区の改良普及所の指導、とくに町出身の岡田豊普及員の献身的な技術指導によって旧資母地区を中心に栽培面積を漸次拡大し、三八年度において

は輸出向け一五万六千球（二〇種）内地向三万九千球（二〇種）県促成試験用三、八〇〇球（二種）等が出荷されるようになり、当時の金額で一〇〇万円を超えるようになった。このためこの年球根選別機を新設して良品種の選別出荷を行なうようになった。

さらに養蚕協業では赤坂について下畑山の永井止夫・永井広志の二戸協業がこの年から新発足することとなり、一戸当一ヘクタールの桑園を造成桑苗六千本を植えた。四年後年四回飼育、收購量二、三〇〇kg、粗収益二二〇万をめざして発足した。（「神戸」三八・八・一二）

この年庶民文化の建築物で但東町が再認識されるようになった。一つは昭和三七年八月前橋工業短期大学の松崎茂教授らの調査について、この年も八月に神戸兵庫高校教諭名生照雄（日本演劇学会会員）の来町により、虫生の安牟加神社の境内にある農村舞台の優秀性が明らかとなった。

但東町では各部落に神社があり、その境内に「舞い堂」「舞い殿」と呼ばれ、狂言や芝居が上演できる舞台を持っているものが多く、その文化的な価値が認められてきたものである。名生教諭等の調査によれば、これら神社境内にある農村舞台には、舞台とは別に「太夫座」を備えたものもあり、虫生・赤野・中畑山・唐川・三原の舞台は上々段（三重舞台）となっており、背景等の遠近法の効果を強く出すよう設計されている。また唐川・久畑などのものは上段が移動式となっており、栗尾などのものは規模も大きい。後・畑・水石のものは佛像なども祀っており、神佛混済のあとを残しており、芝居の小道具なども残されている。落書等によってみてても建築年代はかなり古く、幕末から明治初期にかけ、それぞれ部落の神社の祭り・舞いの奉納その他の集会用のため、氏子の財力に応じて建てられたものが多く、役場や宿場の本陣などと異り、全く

庶民の慰楽のために建てられた民間の公共建物である。祭りや骨休め、娯楽のため地方巡業の狂言師や田舎芝居巡業団がこれを用いて芝居・狂言を演出し、これら演出の元請は若衆や青年会などが行ない、各部落の年中行事となって村人達に広く親しまれてきた。したがって舞台裏の仕度部屋には、地方巡業の役者の落書等も発見され、播州加東郡の人「竹本小住太夫」の名などが落書きで知られている。

但東町にこれらの舞台が多く残っているのは、これらの部落が昔「天領」であったこととも関係がありそうだといわれているが、やはり山村のまとまった集落が多く、この但東町史でも明らかにされているように、昔からそれなりの文化的な住民性があつたことが知られる。明治末期から大正初期にかけて、若者達の間で農村歌舞伎が演ぜられ、夜毎部落でその練習が行われた事を記憶されている古老も多く、これらの伝統的な住民氣質が、これらの舞台を残しているものと思える。したがって中山如布神社境内にあつた農村舞台の如きは「太夫座」などを備えたかなり規模の大きいもので、「太夫座」の舞台下は永く消防用腕力ポンプの置場になっていたが、道路改修や学校移転のため取毀されてしまい、なくなつてしまつたものもある。

また第二に畑山の日出神社の社殿の重要性が認められ兵庫県重要文化財に指定され、その報告祭が一月に行われた。

昭和三九年四月但東町酪農振興会は町内の乳牛が百頭を超えたのを記念して「乳牛百頭まつり」を開いた。町酪農振興会は昭和三六年二月、町内三〇人の酪農家が集つて作つた団体で、最初は僅か三二頭程度で、昔からの和牛を乳牛に代えた程度の集りであつたが、漸く資金の回転率がよく「日銭」が入る有利性が認められて会員である酪農農家も四二戸となり、頭数も一〇六頭を超え、年間乳量三〇万kg(三〇〇t)一千万円

以上の生産高を算する新産業となつた。これらの酪農發展の背後には町の産業振興調査の指摘もさることながら、畜産関係の柏木五郎改良普及員の技術指導の力が大きかつた。町ではこれら先進的經營の農家一〇戸を第一期のモデル農家に指定することにした。

同年四月合併以来問題となつていた町統一消防団の新編成が行われた。消防は町村行政の重要な事業で草葺木造住宅が谷間に散在し、冬期は雪積があり、交通も不便のため、従来腕力ポンプを主体とする各部落編成の消防組織では、よく訓練され、出火時には各寺院の早鐘・半鐘等で知らせても、消防団が到着する頃には炎上している場合が多かつた。町では自動車ポンプを中心に団員三三〇人を再編成して防火と消防に努めることとなつた。

この年五月庁舎を拡張し、町民室を置き、旧四課制を五課制に改めた。また合併但東町の最大の問題は教育行政で、町内には定時制高校二、中学三、小学校一一、幼稚園一一と県下にも稀れな学校乱立地帯であつた。それらの小学校にもそれぞれ歴史と伝統があり、住民の教育の便を考へて設立されたものであつたが、教育の近代化と人件費等の上昇のため町財政の圧迫となり、既に産業振興調査もそれを指摘していた。このため町では同年五月、委員一〇人を以つて教育行政審議会をおき、学校行政の在り方と、交通登校手段の改善を含め、これを中学校一、小学校三に新編成する案を中心として審議することになつた。

八月には工事中の登尾峠の開通式が行われた。峠の多い但東町では主要道路でも車の通れない峠がなお残されており、福知山に通ずる登尾峠もそれであつた。地理的には福知山に最短の距離にありながら、この峠のため山陰線を北上して豊岡まで上り、更に出石を経て豊岡―出石―宮津線県道をバスで帰るといふ三角形

の二辺を交通していた。しかし六年かかった大河内と福知山市上佐々木間四、五料の道路改良工事が完成、登尾峠の隧道と共に、福知山から京阪に通ずる最短自動車道路が開通、昔の京畿道がやっと自動車道となった。宮津線道路の完全舗装と、本道の舗装が完成すれば、以前から鉄道の開通に憧れて遂にその念願を果し得なかつた町民も、鉄道より便利な交通網を得られ、交通立地は現実に改められることとなった。また神戸の阪神変圧器製作所社長桑垣伝の寄附により、但東町側の峠路に桜三八〇本を植えることになり、将来は桜の名所ともなることとなった。（「神戸」三九・二・一七）

この年の五月一〇日の「母の日」但東町は母子福祉大会で唐川の中田すみえ（当時五一才）を表彰した。中田すみえは昭和二七年夫篤一に病死され、以後一二年間女の手一つで一男四女を育てた。真宗の信者で農耕の牛を一日借りるため二日の労力を返し乍ら三人の娘を育て、長男を立派な建築士に、末娘を定時制高校に通わせている働き手であった。またこの年金井兵庫県知事等来町「一日県庁」が開かれたが、その際橋中学校で大井勝夫ほか三人が「のじぎく賞」を受けた。また九月には蜷川京都府知事も来町した。

登尾峠の開通もあつて但馬・丹波・丹後の三たんを京都府兵庫県をのり越えて総合開発しようという「三たん開発計画」が行われることになり、但東町もその開発促進協議会に参加することとなった。この計画は五市・四九町が包含され、関係人口は八一万人となり、京阪神と比較して開発のおくれたこの地方では、その具体的な計画実施が期待されることとなった。既にこの計画の一事業として福知山のもと二〇連隊練兵場跡約七〇〇haの原野の工業団地化が進められており、また渋滞し勝ちの国道九号線にバイパスを作る他、共同の広域し尿、じん埃処理場、保健所、学校等高等教育施設を作るほか、兵庫県側から全但、京都府側か

ら中丹バスの相互乗入れで登尾峠開通後の道路に定期バスを開通せしめる等の運動を一致協力して進めることになった。(「神戸」三九・七・二二) このためにも但東町はじめ各町村の物産の開発、経済交流を進め、それらの開発の経済効果を發揮しうるよう努める必要があることが痛感された。

この年、九月第一回の但東町民体育大会が開かれ、三〇〇〇人の町民が参加した。三千人の住民を動員したのはこれが始めてであった。

なおこの年合橋地区青年団が地区青年を対象とする世論調査を行った。これは最近における農村青年の意識を調査したものとして注目されたが、日常生活に満足しているか否かの問いに答え「いない」が五五%を占め、若者の農村生活における不満を示し、そのための最も深刻な悩みについては、封建的な人間関係を指摘したものが三七%をしめ最も多く、単なる住宅の新築だけでなく、内面的な家族関係、農村集落のコミュニケーションの近代化の必要性を示していた。また結婚に対する考え方については、「見合いのあと恋愛」という現実的健実派が六一%を占めており、町公民館を活用する結婚式に賛成のものが五八%をしめていた。これは昭和三八年四月、町の公民館活用による新生活運動による公民館結婚式が比較的支持されていることを示しており、これらの町行政にも多くの示唆を与えるものであった。(「神戸」三九・七・二〇)

一〇月には中山郵便局開局九〇年の祝と、局舎の新築落成の式が行われた。

また一一月に町は国民年金事務優秀町として厚生大臣賞を受けたし、一二月には林業構造改善事業の指定町となり、三カ年で事業費七、六〇〇万円を受けることとなった。

昭和四〇年三月、兵庫県から阪本神戸商大学長等に委嘱し調査を進めてきた「但東町地区開発調査報告書」

が作成され、交通条件の悪い実態を改めて確認すると共に、養鶏・酪農・梨・栗・繭・生しいたけ等を加えた自立経営標準農家のモデルを示し、交通立地の改善と、生鮮食糧品の増産・開発により、京阪神への計画的出荷等の必要性を勧奨しているのが注目された。(四〇年三月刊)

またこの年京都大学の但東町地震観測室の建設工事が、三木晴男教授の指導により高龍寺岳に進められた。四月には農業の面ではモデル農家の経営成果の発表会が開かれ、多くの零細兼業農家の中に、自立経営農家の成長しつつある一面も知られたし、秋には共同作業の面でヘリコプターによる農業撒布がはじめて大野たんぼで行われた。

九月には農免道路の施工が議会で決定され、町内道路整備に一役を買うことになったし、一〇月の国勢調査では、世帯数一、七六四、人口は七、八一六人(男三、七四九・女四、〇六七人)で女の方が多く、増加よりも減少という山村経済の一面が明らかにされた。

また町では町内の自然の美やレクリエーションに好適な風光の美しい地区を選定し、町内のレクリエーションの財産とすることを決め、五月自然公園の候補地を選ぶことになった。このため奇岩の多い赤花の大師山を自然公園の候補地に指定、青少年レクリエーションセンターとしては坂津の般若高原を候補とした。

昭和四一年三月、町の合併以来問題となっていた旧村単位の農業協同組合が合併し、但東町農協として新発足することになった。組合員は一、八八一人、出資総額は一、六三四万円であった。

三月には出石高校但東町分校が発足し、生徒六九人を収容することとなった。また学校統合実行委員会も発足し、一中・三小への実現を具体化することとなった。そして九月には三原の山腹に但東町中学を建築す

ることが決った。この頃中山に織物指導所も新築されることとなった。

九月三〇日合橋中学校講堂で但東町制一〇年式が挙行され、前町長西本高志に自治功労賞を贈り、この日町民歌を発表、その作詞作曲者に感謝状を、記念作文入賞者等が発表され、文集「一五年後の但東町」が印刷配布された。また十一月には働く婦人三八二人への健康診断が行われた。

昭和四二年一月町議会議員と衆議院議員の選挙が行われた。町内有権者の党派別投票数はつぎのようであつた。

自民党	一、八九一票	四三・四%	・当日の有権者五、〇八九
社会党	七五二票	一七・二%	・投票者 四、三九〇
民社党	一、六六二票	三八・二%	・有効投票 四、三五五
共産党	五〇票	一・二%	・無効投票 三五
			・投票率 八六・三%

また二月には漸く頭数を増した乳牛の内その半数は乳を出さない雄牛が生れるので、これを共同で飼養肥育して販売する乳用子牛の集団は、育施設設置事業を実施することに決め、事業主体は町農協、場所は小谷の奥山長谷とし、その補助金を地方競馬会の畜産振興資金（地方競馬の収益金の法定積立金）に申請することとなった。

三月には高橋・合橋中学の閉校式を行ない、四月より新中学に合併されることとなった。この中で資母中学にプールを建設することが決った。

七月には林道親谷線が竣工し、この月の町長選で永井町長に代り、田畑憲一が三代町長に就任することとなった。

2、但東町農協の成立

昭和四一年三月三十一日旧三村農協は解散し、但東町農協が発足した。また新発足と同時に「たんとう町農協だより」一号ができ、以降月刊で毎月配布されるようになった。最初は資母農協事務所で業務を開始し、合橋・高橋農協の事務所は支所として発足した。合併の結果、米の予約も二六、四〇〇俵に達するようになった。またその頃「椎茸乾燥所」が完成、山の多い但東町林産物の商品化に一役を買うこととなった。

四四年五月チュリップ集荷乾燥所が新に完成し、前述の畜産センターもこの頃完成した。またこの年そ菜団地共同育苗所が設置され、野菜の生産出荷の有力な基盤を築くことになった。また管内に「一万羽養鶏」も出現し、生産面でも各種の農畜産物が出荷されるようになった。そしてこの年の年末農協スパーともいわれる組合マーケットが中山にオープンされ、移動販売車ひまわり号と共に消費・販売の面に大きく進出することになった。更に昭和四五年にはガソリンスタンド給油所も設けられた。昭和四六年一月には農業後継者優秀賞が授与され、七月には若い酪農グループも表彰された。また九月には採卵養鶏育雛施設が二ヶ所に増設され、野菜集荷施設も完成した。この年の年末には椎茸集荷貯蔵所も新たに建設された。更に採卵と相まって「食鶏処理工場」も委託経営の形で完成し、一二月には「稚蚕共同飼育所」も完成した。

昭和四七年四月には大型の共同水稻育苗施設が完成、一〇〇ヘクタール分的水稲苗を育成する能力をもち、田植機と直結して、田植え作業の機械化を推進することになった。また家庭燃料のLPガス化に伴ない「L

Pガス集団供給施設」が年末完成、常時二〇〇戸に配給するようになった。

このような各種施設の完成により、農協経営も多面的となり、広く地域社会に奉仕することとなったが、中心は農業協同組合であり、農業生産の発展が使命であるので、昭和四八年度から営農と営農団地の育成にも力を入れることとなった。そして畑には百頭飼育の近代的肉豚生産農家、河本には繁殖和牛の専門的経営、野尻にはビニールハウスによるプロイラー経営等が発足し、農協はこれらの指導育成に力を入れると共に、西谷には「しいたけ栽培」、小谷には花木生産組合が結成された。飼料自給強化のために、粗飼料生産組合を設け、経済環境の変化に対応しうる農業の育生に努めることとなった。また農業共済、貯蓄強化優良組合として表彰された。その他最近特産縮緬の協同組合間販売の促進等にも努めている状況にあった。

三、田畑町長時代

昭和四二年はわが国の民間の設備投資が前年に較べ三三%増加し、これが好景気の口火となつて実質成長率が一三%となつた年であつた。そのため従来「岩戸景気」といわれたのが「いざなぎ景気」と呼ばれるようになった。この年の七月の町長選で、田畑憲一が選ばれ、以降二期に亘つて町長を努め、田畑町長時代を迎えることになった。但東町は県北の山村であり、一部縮緬織物業の好景気はあつたが、当時、中央で騒がれるほどの好景気がこの山村をうるほしたわけではなかつた。しかしこのような民間設備投資の膨張政策に伴つて、公共事業や地方官庁の設備投資も助長され、この時代に町内の多くの新しい設備が次々と完成されていった。これらの高度成長政策の行き過ぎは、インフレを助長し、石油等の世界資源の供給不足を楔機と

してのちに総需要抑制、公共事業引締め、設備投資の圧縮時代を迎えるのであるが、この時代からふり返ってみると、他の町村で計画されている各種の設備を計画すれば、順位はあったが何の制約もなしに設備が建設できたという意味では、まさに幸運な時代であり、町としてもこの時代に設備投資ブーム時代を迎えたと見える。

この年の一〇月、国の文化財専門審議会の委員郡司正勝早大教授、国立文化財研究所員山路与造等四人が、但東町の「太古踊り」等の調査のため来町した。

太古踊りは「ささばやし」ともいわれ、虫生の安牟加神社の例祭に毎年奉納されている踊りで、しんぶち（新発意）とメ太鼓の二人の子供達が三人で踊り、歌詞も一〇種類もあった。

（既述「芸能文化と庶民信仰」参照）

文化委員等の調査によれば、この踊りは全国的に有名となっている「ザンザカ踊り」と似ており、今より五〇年も前の室町時代に流行した「風流」系統の踊りと歌をそのまま伝えていたものと判定された。この太古踊りについては、桐山宗吉著「ふるさとの祭り」（「のじぎく文庫」）で紹介されているが、文字も記録も残していないその頃の住民が、神事ともからめて、親から子へ伝えてきた庶民の踊りと行事で、全く町や村方文書などにも残されていない、山村庶民の残した無形の文化財の一つといえる。前述の奥藤や赤野神社に奉納されている「太刀振り」等と共に、踊りの形で残され、伝えられてきた住民の遺産である。ただ系統としては前にのべたように、「太刀振り」は丹後一の宮（宮津市）等から丹後地方の街道沿いに伝えられてきたものであるが、この「太古踊り」は室町時代からの風流系統に属しながらも、他の但馬地方の「ざ

んざか踊り」、播州の「ちゃんちゃこ踊り」と幹は同じでも丹後圏の踊りに属し、丹後文化からの移入によるものと見られ、中世以降の但東町の人々の丹後との交流の多かつた事を示していると報告されている。

なおこの一行はこれも前記の但東町内の神社に残っている「農村舞台」についても調べた。この舞台の建築や利用でも丹後文化との交流が深いことが裏付けられた。すなわち虫生舞台の構造等調査中、「文久元年（一八六一）仲夏二五日若狭藩中石井某」の落書が発見され、役者が丹後・若狭方面から入ってきていることが明らかとなった。ここにも庶民の残した記録があることが発見された。（「神戸」四二・一〇・一〇）

四三年の経済成長率が一三・八%と更に躍進する中で、七月資母中学校のプールも竣工し、まず田畑町政設備プールの第一号となった。

但東町は出石川の上流の谷間に溪流があり、水田用水のための井堰等もあつて所々に水を堰えており、夏はその川が唯一の水泳場であつた。自然の川の水泳であるので、何の設備もなく、幼い子供などは自然の川の深みに足を奪われて、溺死するものもあつたし水涸れ期の川水は汚れて衛生的にも問題があつた。この資母中学のプールは、はじめての近代的な水泳施設として新設され、児童はもちろん、一般の水泳愛好者にも喜ばれた。

また但東町は旧三村では多少の差はあつたが、いずれも医療施設には恵まれない過疎地であつた。

後にみるように、旧村時代にはそれぞれの村に医師が医院を開いており、医師は村の有力者であつた。しかし自給経済時代が終つて、設備も近代化が必要となり、後継者たる子供の教育にも金のかかる時代となるにつれて、僅かの人口を対象とする医療では経営が困難となり医師は相次いで離村し、中には資母地区のよ

うに全くの無医村となった時代もあった。医療は衛生保健行政と共に、町村の重要な町民のための行政であるが、人口の少ない町村では極めて困難な行政であった。このため昭和四三年七月現在で国民保険に加入している被保険者を一〇才単位に集計した昭和四二年度の「医療統計の分析と解説」が公表された。

この統計によると、住民登録人口七、八〇二人（男三、七三五女四、〇六七）の中、被保険者の年齢構成は一〇―一九才層が最も多く一九・七％、次いで四〇―四九才層が一四・二％、次いで三〇―三九才層が一・九％、五〇―五九才層が一・八％、九才以下が一・六％となっており、二〇―二九才層が七・七％で青年層の少い構成を示していた。また病類別受診統計では、普通「呼吸器系病」が最も多く、次いで消化器・循環器・神経系疾患となっていた。また入院費用では、一般に多く費用の嵩む消化器系が最も大きく、三一八万円、ガン手術等の含まれる「新生物」疾患が一・二九万円、循環器系が九八万円となっていた。その一件当り費用は、六万八千円で最も大きく、歯科を除く病類総平均医療費は一件当り入院三万円、外来二、二四七円となっていた。

この一世帯費用から保険税負担額と医療費の一部負担を差引いた国民健康保険の受益は、全体の平均で一世帯当り一万六千円となっていた。（同統計四三年七月による）

昭和四三年は三原向山の台地に工事中の統一新中学校舎が完成し、三村時代から懸案の「学校統一」が実現した年でもあった。即ち三月一九日各小学校閉校式、三月二〇日新中学校本館完工、四月一日幼小中学校が統合され、八月一〇日に統合中学体育館が完成した。

この統合によって一・小・三中のうち複式学級をもつ小学校が九校、要改築校舎九校もあり、児童生徒当

り消費的支出が五万円を超す状態にあった学校行政が合理化されることになった。将来は一中・三小・三園を目ざし更に合理化が行われることになり、そのため基準距離を超えて通学するものに通学費（バス代）を助成する条例が作られ、実施されるようになった。（「但馬における学校統合」四三・二刊）

この年の四月には山村振興法による振興地域に指定されたし、出合市場から佐々木に通う全但の定期バスが運行を開始した。また学校統合に伴う旧校舎を工場に転用し、工場誘致を図るため「伊木電機」「加古工業所」等が相次いで操業をはじめることになった。

また四二年の大豊作のあとを受けて米不作から米過剰の状態となり、古々米在庫が増大したため政府は米の減産のため「休耕田」に補助金を出すことになった。このため四三年の夏から秋にかけては、但東町内の谷間の水田にも、休耕田が見られるようになった。

昭和四四年には町内の農免道路が完成し、町道整備と相まって、道路交通は大いに改善された。したがって高度成長ブームもあつて町内の自動車の台数も大いに増加し、それに伴って青年男女はもちろん、中高年層の自動車運転免許獲得のための講習所通い等も盛んとなった。

学校統合・産業振興・道路整備行政の進展と共に、町では住民の健康と福祉対策の推進が遅れていることにかんがみ、この年の年度始め1、環境衛生指導強化。2、生活改善指導。3、体力づくり。4、疾病予防対策。5、「健康な町づくりの推進機関」の設置等の五項目を主とする「但東町総合保健福祉活動計画」を策定した。四四年以降の福祉対策は、この方針から進められ、保健所等を通じ各層各種の検診も行われるようになった。

そして四月町は「結核対策推進優良町村」として表彰されることになった。大正初年より昭和の初年にかけて町内には結核患者が多く、暗い納屋に寝たきりの患者の多かつた時代と比較して医療保健衛生の進歩により隔世の感があり、それら行政の重要性が再認識された。

各種の建築・道路河川工事等の増大に伴ない、採石・採土・コンクリート事業は重要な資材産業となった。このためこれら事業の請負業を中心として、この年の七月「但東開発株式会社」が発足した。町の各種施設の整備、学校等公共建築事業の増大に伴って、それらを請負う会社が必要であった。この会社は建設工事と採石砕石採土等を行うもので、近代的な砕石工場を畑山と出合市場に設け、他からの移入でなく但東町内の工場企業として発足した。

八月にはNHKの但東放送局が開局され、山の上に受信装置が新設された。それと同時に各戸にカラーテレビが大いに普及した。これまた戦時中のラジオ時代と思い合せて時代の進歩を想わせるものがあつた。

またこの月合併以来三年を迎え、但東町農業協同組合の本所が出合に竣工、役場・学校と共に政治・教育・経済のセンターが出現した。出合には近代建築が軒を並べ、高度成長の外観を形成していった。設備投資時代が町にも訪れた事を示すものであつた。

またこれらの高度成長時代の表われとして、この年から町内の「温泉調査」が始まつた。城崎町の繁栄に倣って、町内の温泉資源の調査を行はんとするもので、八月三十一日、住吉正一（もと城崎町課長）・垣田平治郎（出石高校教諭）の「但東町の温泉について」が発表された。

また九月には同じく出合に「学校給食共同調理所」が完成し、九月二二日から学校給食を開始した。「科

学的衛生的調理方式によって、生活の合理化と栄養の改善をはかり、併せて児童生徒の健康の増進と、体位の向上をはかる」というものであったが、もともと学校給食施設として作られたもので、農繁期の給食や、織物工場の給食センターを兼ねるものではなかった。しかし小学生には一食四六円、中学生・職員には五六円の栄養給食が、学校統合の付帯施設として生誕し、一号・二号の給食車で学校まで送られることになった。昭和四五年は貿易の自由化・資本取引の自由化という国際競争激化の中で、八幡と富士鉄の合併が行われ、町村・農協合併について銀行・企業の合併が促進された年であった。

一月には全国の優良町村として全国町村会長から表彰をうけた。また三月には但東町農協は「営農活動の現状と今後の方向」を発表、酪農・肉用牛・養豚・養鶏・ブロイラーのみならず、裏作野菜・花卉・露地抑制野菜・養蚕・しいたけ・栗等の林産物の増産計画を発表した。

七月には但東中学のプールが完成し、秋には生活改善センターが完成する等、新町制の発足と共に、各種施設の集中が行われ、出合は文字通り新しい町の中心となり、一種の官庁街集落が完成していった。

この年の七月「過疎地域振興計画書」も作成され、教育や生活環境整備、医療の確保と共に、交通・通信・農林業その他産業の振興と集落整備の計画が提示された。のぞましい集落移転はできないので、母集落と連絡道路を整備し、町内の部落の格差の是正に努めること等が決められた。

かくて一二月八日新装成った生活改善センター「であい」で町表彰條例による第一回表彰式が行われ、つぎの九氏が町政上の功労者または善行者として表彰された。

被表彰者の略歴

(昭和四五年一二月八日現在)

西本 高志

明治三〇年一〇月二五日(七三才)
現住所 佐田三二五番地の二

昭和四年四月高橋村議會議員に当選以来昭和二二年三月まで三期一三年一〇カ月にわたって在職、昭和二二年四月高橋村長に当選、昭和三一年九月町村合併による解村まで連続三期九年五カ月にわたって在職、昭和三一年一月初代但東町長に当選し、昭和三四年七月辞職まで二年八カ月在職、現在高橋財産区議會議長に在職中。この間、昭和三二年自治庁長官表彰、昭和三二年兵庫県知事表彰、昭和四三年勲五等瑞宝章を受けられた。

永井 幸彦

明治三〇年四月一〇日生(七三才)
現住所 畑山四九〇番地

大正九年九月から同一〇年八月まで資母収入役に就任、昭和四年四月資母村議會議員に当選以来昭和二〇年四月まで三期一二年七カ月にわたり在職、昭和二〇年四月から翌年二月まで資母村助役、昭和二六年一〇月から昭和三四年六月まで七年九カ月但東町選挙管理委員長を歴任、昭和三四年七月但東町長に当選、昭和四二年七月まで連続二期八カ年在職、現在但東町森林組合長に在職中。

永井 加多次

明治三七年三月一五日生(六六才)
現住所 畑山六五九番地

昭和一二年五月資母村議會議員に當選以來三一年九月町村合併による解村まで四期連続一九年五カ月にわたって在職。合併促進法の特例により引続き但東町議會議員となり、三三年七月まで在職、昭和三八年二月再び但東町議會議員に當選以來現在まで連続二期にわたり在職中。この間昭和四三年全国町村議長会表彰、昭和四五年兵庫県知事表彰を受けられた。（注 昭和四九年勲五等瑞宝章受章）

佐 古 彌之助

明治一十九年一〇月二日生（八四才）
現住所 奥藤一九四番地

明治三五年九月資母村議會議員に當選、明治三九年一二月まで四年三カ月在職、大正六年四月資母村議會議員に再び當選以來大正一四年四月まで連続二期八カ年にわたって在職。昭和二年八月方面委員に就任以來昭和三七年一月まで方面委員或は民生、児童委員として連続三五年三カ月にわたって在任。この間、昭和二九年に兵庫県知事表彰、昭和三二年厚生大臣表彰、昭和三六年藍綬褒章、昭和四一年勲六等单光旭日章を受けられた。

大 石 徳 雄

大正一一年一月三日生（四八才）
現住所 兵庫県伊丹市南野辻六八〇三（平田出身）
職業 三菱電気北伊丹製作所 社員

工場誘致は過疎化の傾向にある本町の宿願であったが、学校統合がスタートするに及んで廃校舎処理と関連して、この実現に努力していたとき、たまたま来町された氏は、郷土の発展の為に勤務先の三菱電機北伊丹製作所幹部に町の実状を伝え、以来町と会社側との縁結び役として努力され、ついに伊木電機株式会社

と加古工業所の二企業の誘致が実現した。この工場誘致が実現した蔭には、氏の郷土愛と、勤務先における高い信用度の所産であり、今後町の発展と、住民福祉向上に寄与するところ大である。

桑垣 伝

明治二七年一〇月五日生(七六才)
現住所 神戸市灘区篠原本町三丁目三七番地(大河内出身)
職業 株式会社 阪神変圧器製作所会長・阪神但東会長

昭和四三年但東町学校統合と但東中学校の建築に際し、教育への深い理解と郷土愛により、私財一六四万円を以って、次の施設備品を寄贈され、学校教育に寄与された。(注 昭和四六年勲四等瑞宝章受章)

但東中学校 学校図書(桑垣文庫) 一〇〇万円

図書閲覧机 一四万円

高橋小学校 エレクトーン電子オルガン 一八万円

放送設備一式 三二万円

高橋 巖

明治三七年一月二〇日(六六才)
現住所 京都市中京区川原町通り四条上ル(東里出身)
職業 ナガサキヤ社長・京都但東会長

教育に対する深い理解と郷土愛により、資母中学校、資母小学校の施設備品の整備等に二二〇万円以上を寄付され、教育振興に寄与された。主なものは次のとおり。

資母中学校図書(群山文庫) 五五三、〇〇〇円

図書机 五〇、〇〇〇円

資母小学校 タテ型ピアノ

二一〇、〇〇〇円

プール建設

一〇〇、〇〇〇円

子午線塔建設

五〇、〇〇〇円

群山文庫については今も毎年五万円相当の図書が贈られている。

多田 正夫

明治四四年一月一日生(五九才)
現住所 出合市場二二番地
職業 医師

但東町学校統合を期に合橋小学校にアポロブランドピアノ一台(五五〇、〇〇〇円)を寄贈し、児童の情操教育に寄与された。

山田 忠雄

昭和四年六月二五日生(四一才)
現住所 東中一三九番地
職業 製材業

高橋診療所増築工事にあたり、五八〇、〇〇〇円の私財を寄贈して施設の充実に寄与された。

つづいて、一〇日には町議会第百回を迎える「一〇〇回記念式」が行われ、永年勤続議員・職員の表彰も行われるとともに「議会一〇〇回の歩み」が発刊された。「到る所に機音(はたおと)が聞かれ、乳牛の啼声もきかれ、かつての農林一本の産業構図も変った」とそのあとがきに書かれている。

昭和四六年には町の体育協会が発足、町長の体力づくり行政の一端を担うことになった。七月末田畑町長

は再選され二期目の町政を担当することとなった。

ドルショックと為替相場変動による景気停滞も、この秋には漸く回復に向い、農業生産も前年比六・二%増加、農家の平均総所得も二一・三%増加した。しかし但東町の零細経営農家は所得の上昇以上に消費生活の上昇による消費経済の膨張に悩んだ。これらは兼業所得で補う他はなく、毎年の出稼ぎ者は依然として三〇〇名を超えた。

一〇月町消防団が再編成され、近代設備をもった機動消防団が配置されるようになった。また、七〇才以上の医療無料化が実現することになった。

昭和四七年一月には老人憩いの家が久畑に竣工した。また、この頃から新しい但東町勢振興計画の策定が初められたが、その計画書は四八年四月に印刷配布された。

四月に入って国民健康保険の世帯主医療費助成、乳幼児医療の無料化等が初められ、児童福祉金制度も発足することになった。また、この月から「社会教育指導員」が設置されることになった。

従来比較的美しい水に恵まれた但東町では、美しい谷水や井戸（横掘り、縦掘り）等で飲料水を確保して来たし、簡易なモーターによる個人水道も漸く整備されてはいた。しかし自然用水も衛生上の危険があったし、水の使用量も増加し、住宅の改善改築と共に上水道の設置が要望されるようになり、集落毎の簡易水道の設置が計画されるようになった。このため町でも「広域簡易水道推進本部」を設け、水道行政に取組むこととなった。そしてまず合橋地区を主体とした中部水道工事に着手した。

また、丹後織物組合の「お国練り」に習って、縮緬織工業の自立化を促進するため、精練加工場の設置が

懸案となっていたが、苛性ソーダ等を使用するため排水の公害が心配され、その設置場所や、技術的な浄水装置が問題になっていたが、それぞれ妥当点に達し、この年の四月中山に竣工した。この精練工場の完成は永い但東町の縮緬工業にとっては画期的な出来ごとであった。

また、七月には高橋小、翌年七月には合橋小と、町内の各合併小学校にプールが完成した。

また、一月には、福知山―但東町―出石の道路改修が終わり、登尾峠を経て福知山への道路交通は整備され、幹線道路地図を一変することとなった。この路線のち舗装も完成し、出合から福知山まで自動車で僅か四〇分の時間距離となった。

生活様式の近代化、商品包装の変化、家庭燃料の変革等は、避地山村といわれてきた但東町にも「ゴミ処理」が住民に密着する末端行政として問題となってきた。やがて農山村にも非農家の増大と共に糞尿処理も問題となる状態になってきた。したがって各町村はそれぞれゴミ処理場を設置してきたが、但東町でもその設置が必要となってきた。このためつねに全国町村並みの施設の設置を心掛けてきた町は、出石町との共同設置案を樹立し、その建設計画を樹てることとなった。しかし、新聞やテレビ等でゴミ処理場の公害問題、ハエ発生問題等が大きく報導され、住民の関心も高く、その設置箇所が問題になった。最初出石町との共同設置で両町境の水石・寺坂地内に設置を決めたが断られ中断になったがその後三菱電気、伊丹製作所の申入により町との共同設置が企画され、町ではゴミ処理場建設問題特別委員会を設けて検討することになった。また、年末の一二月、最初の町営住宅一〇戸が完成した。このように町行政は純農村行政というよりは、一般都市の行政に倣う広汎な行政を行うようになった。

昭和四八年三月、資母公民館が竣工した。合併紛争以来の一つの懸案はこれによって果され、資母支所を兼ねる事となったが、会議室、小集会場、料理室、宿泊施設、喫茶店まで併置した公民館となった。

四月には但東町振興計画書が印刷配布された。この計画書は町勢振興の基本的な考え方を「快い生活環境づくり」と「暮らしを高める」ことにおき、合併以来も人口の減少しつつある町の人口構造、近代化と消費生活の膨張しつつある町民生活の将来像を想定し、振興の課題を、1、健康な町づくり。2、豊かな町づくり。3、住みよい町づくり。4、人間性と社会性に富む人づくり、5、自然を生かした観光の町づくり等においた点が特色であった。

豊かな町づくりでは農業の大型化、地域の特性を生かした畜産の振興、造林、牧野改良を含む山林の活用縮緬工業振興等を挙げているが、産業経済の振興という困難な行政よりも、一般行政ベースによる施設中心の町づくり計画に重点がおかれたものであった。(同計画書)しかし、現況、問題点、課題と目標を明らかにした点が注目された。

六月には町長の発想によるこの町史の編纂委員会が発足した。来る町制施行二〇周年記念事業として考えられたもので、各町とも町村行政の一巡と共に、二〇周年事業や、町史編纂事業を行う町村も多くなり、それに倣ったものと思われる。このような文化的な事業も構想されたところに、優れた行政人としての田畑町長の一面が知られた。

七月には歯科診療所が開かれ、また、町行政機構を改め、生活課や同和対策室をも設けることとなった。また、懸案のゴミ処理場は三菱電機伊丹製作所との共同設置とし、設計が具体化した。しかし、候補地と

なった平田、或は高竜寺地区は住民合意が得られなくなった一二月には町ゴミ処理特別委員会が報告を行った。その内容は公害問題には慎重な配慮を行い、三菱電機との共同設置は止むを得ないが、処理は町が責任をもって行い、「主体性を失うな。とくに設置の候補地については白紙撤回し、地域周辺の十分な理解を得て決定せよ」、というものであった。また、この処理場は可燃ゴミに限られ、硝子、金属等の不燃物の処理は行わない事になっているので、その対策をも早急に講ずべきだというものであった。(昭和四八年一二月二七日「神戸」但馬版)

この年の一〇月石油ショックと世界的資源の供給制限が発端となって、インフレと物価高によって架空の成長を見せていた日本の高度成長政策は金融引締め、総需要抑制、公共事業繰延べ等への転換を余儀なくされた。そしてインフレ倒産、もの不足倒産が相次ぐようになった。このような経済変動を敏感に反映して、但東町下の織物業界はかつてない不況に見舞われ、その後の総需要抑制と原料生糸高により、一時は一反の縮緬を織る度に三千円の損をする状態となった。しかも下請賃織のため、全然操業を停止し得ない状態に追込まれた。しかし、その中でも新設の精練加工場だけは結構稼働を続けた。(五カ年生産高次表の通り)

昭和四十九年はわが国の国民経済が初めてマイナス成長となった年であった。不況は浸透し、高度成長時代は減速経済・低成長時代に移行することになった。しかし、公共料金はじめ物価高とインフレはすぐには止まなかった。公共事業は続いて引締められ、人件費は上り地方公共団体の公営企業は赤字となり、地方財政も国の財政も苦況に陥る時代となった。

この年二月ゴミ処理施設は漸く矢根に決定された。三月には町内の電話が自動化された。

図表88 最近5カ年の但東町織物生産高

別	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年
設備(台)	1,648	1,754	2,026	2,112	2,165
点数	620,412	628,348	659,493	653,401	514,233
平方米	2,468,564	2,526,046	2,603,957	2,652,719	2,078,420
価格(千円)	4,626,668	4,537,304	6,888,247	10,332,787	7,353,352

また、大野、水石地区のほ場整備が完成した。六月には一人暮しの老人の電話サービスが初められることになった。しかし広域水道計画は公共事業費の繰延べで改定されることになったが、七月には資母小のプールが竣工し、町内の公共事業である矢根地区の河川改修や、中山のバイパスの道路工事及び、矢根地区のほ場整備事業等は着工されることになった。

一月には第二期山村振興地域に指定が決まったし、国の重要文化財として解体修理が行われていた畑山の日出神社が修復された。

この年の年末中部水道が竣工し、町内の上水道の設置も次第にその輪を拡げていった。この年、林野庁の森林担保金融制度の調査が但東町で行われ、その結果が「森林担保金融制度に関する調査研究報告書」として発表された。その中で但東町の林業の経済構造と、公有林並びに私有林における森林経営の実態が明らかにされ、その森林金融の実情も明らかにされた。(同報告書八一〜九七頁)

昭和五〇年三月には基幹集落センターが佐田に竣工し、但東町内にまた一つセンター施設が増加した。また、四九年度の事業として行われていた「農村集落総合計画策定事業報告書」が、印刷公表され、町内平田部落整備に関する詳細な基礎調査が完成した。まず、集落の概況が詳しく調査され、集落

再編の未来の座標が設定され、集落総合整備計画が県普及教育課と豊岡農業改良普及所の協力で策定され、いわば設計図を引くための調査であったことと住民会議等で、集落整備を自分のものとして考え、住民の手で築き直すための調査であったことが注目されるべき点であった。(同報告書二四五頁)

また、六月には問題であったゴミ処理場が完成し、ゴミの町内巡回回収、処理が行われるようになった。

七月の町長選で任期満了で勇退の田畑憲一にかわって助役福田芳郎が四代目の町長として町政を担当することになった。

四、戦後町教育の進展

1、地域社会の実態に即した教育の推進

明治初年学制がしかれて以来、如何にしてこの地域の実態に即した教育を推し進めるかは、学務委員・学校管理者・校長のひたすらなねがいであり、そのためにいろいろな措置がとられてきたことは、既に見てきた通りであるが、いつの間にか「富国強兵」の国のねがいの方が先行してしまい、悲惨な敗戦を招き、多くの尊い戦争犠牲者を出す結果になったわけである。

このことに鑑み、新教育では、ひとりひとりのいのちと生まれがいを大切にし、しかも、憲法で宣言したような「平和的国家及び社会の形成者」を育てようということになったわけで「教育委員会」が、その推進母体となったのである。

一方、その具体的実践者である教師には、一人々々について、いわゆる「適格審査」が行われたばかりか、

「六・三制」の新教育に当たるものとして、それにふさわしい力を持たせるため、いわゆる「認定講習」が繰り返され、その受講によつて必要な単位を取得しなかつたら、新教育の担当者として資格が与えられないこととなった。

この地域の教師たちは、このような学習を進めながら、戦後の物資の乏しい中、不備な条件の中で、地域の実態に即応した教育を推し進めていった。

そして、そういう教育によつて育つた子どもの作文が、昭和二九年八月にはNHKによつて放送されるに至っているのである。これは「山かいたの人々」という題で、資母地域の実態を太田小学校の子どもが、子ども目でもとらえたもので反響を呼んだ。またこの年の一月には、太田小学校において、県教委主催の「小組織学校経営研究会」が開催され、太田小学校の地域に即した経営の実際を全県に対し公開している。

この全県的な研究発表会は、更に、昭和三十一年二月、赤花小学校の実践を公開する形で行われている。因に当日の日程の記録を見ると、

- 1、児童中間行事（体操）週番発表
- 2、授業公開
- 3、全校児童会（山の神・天神講について）
- 4、児童終会
- 5、研究発表 会場法華寺

学校発表 社会性ととりくんで赤花の子供をみつめる 桑垣真

父兄発表

子供の予算生活について 父親 中野 逸男

大人文集のもたらすもの 母親 大西ひろ子

部落共同学習について 母親 能勢 栄

6、研究協議 意見発表

7、講演 県教委指導部長 恩賀 一男

となつており、地域ぐるみの教育経営が発表されている。

この地域ぐるみの教育経営は、昭和三四年一二月には、文部省の指定によつて、久畑小学校薬王寺分校を会場として発表されており、当日は、畜産組合もこれに協力して「いなきばつる牛」の展示も行つてゐる。

この外、戦後の虚脱と混乱の中から、ほんものの教育は何かを探り求め、村を愛し、村を創る者を育てることを目指し、地域ぐるみの教育実践を推進した記録「村を育てる学力」は、相田小学校を舞台としたものであり、全日本に大きな影響を与える役割りを果たしたことが中央公論社が刊行した「日本の歴史」にも記されている。

中学校においても、合橋・高橋・資母三中学とも、農園経営・果樹園経営にとり組ませたり、山林経営にとり組ませたり、この地域の未来を担う者を育てることを、強いねがいとして実践を進めている。資母中学は、昭和二十七年「産業教育振興法」による研究指定を文部省から受け、翌二八年にその発表を行つてゐる。

また同じ年に資母中学橋本校長は、兵庫県教育長の推せんにより、文部省が主催する、中部・近畿中学教育

研究集会に兵庫県代表として出席・実践を発表している。昭和三十七年には高橋中学が「きり拓く人間づくりの教育実践」を発表している。

なお「差別」をゆるし、見過ごしてきたこの地域の住民の意識改造こそ、この地域の教育課題であるべきであるという立場から、各小中学校とも、同和教育の推進に努力しており昭和三〇年には資母小学校を会場として、この問題が研究討議されている。昭和三五年相田小学校がその実践を発表した際には、西播地方からも多数来訪参加した。中学校では、三七年合橋中学校がその実践と研究を発表し、中学校における同和教育の進め方について訴えている。このようにして、この地域の各学校在、毎日の教育実践そのものを問いつめる仕方、教育の本質にかかわる問題として自己点検を加え、同和教育を推し進めるようになってきたのである。

2、生涯教育・社会教育の推進

この地域でははやくから幼児の教育が注目されており、相田校では大正一二年、資母校では昭和初年期に「幼稚会発会式」を行っている。河本校の沿革誌には「昭和三年六月六日始メテ本校ニ農繁託児所ヲ開設ス」という記録が見られる。また、学校統合によって唐川小学校が廃校になるにあたってまとめられた開校以来九二年間に亘る地区の人たちの回想録の中には、大風水害のあった昭和九年の農繁託児所の思い出の大きな役割を果たして今日に至っていることが感動的な事実で語られている。

高橋地区においても「昭和一一年五月二〇日平田幼稚会朝日新聞社ヨリ表彰セラル」と平田小学校が記録しているから、幼児の保育が方々で行われている中でも、よほどの成果をあげていたものであろう。

しかし、幼児の教育が本格的に考えられるようになったのはやはり戦後で、合橋地区では、昭和二九年四

月、それぞれ小学校に幼稚園を付設している。資母地区では、昭和三〇年八月、太田小学校に「太田校区保育園」が開設され、毎週火・金曜の午後、小学校教諭の奉仕によって保育が始められている。そして、これが昭和三二年「但東町立」として、各小学校区毎に開設されるに至ったのである。

青年期の教育についても、既に、明治の末期から「補習教育」というような名目で、各小学校が、その卒業生を集めて自主的奉仕の形でこれにあたっており、大正期に入ると、これが「農業補習学校」というはっきりした形をもつようになり、「村立農業公民学校」になる。昭和に入ると、これと並んで「青年訓練所」が設けられ、これが統一されて「青年学校」になって、壮丁検査前の教育が行われるようになるわけであるが、もちろんこれは敗戦とともに廃止になった。「六・三制」は発足したが、義務教育終了後の青年期教育の機関がこの地域にはなくなってしまうたのである。

何とかして「高等学校」が欲しいという要望が先ず実現したのが昭和二三年で、「定時制高校資母分校」である。既述のとおり当初は、資母中学校長がその管理運営の責任者として発足したわけであるが、後には定時制高校生が中学校の農業実習助手として、中学校の産業教育推進に協力するというような形も生まれていった。その定時制高校の果たした役割りと実績から、更に要望が昂まり、昭和二七年には高橋地区で村民大会がもたれ、翌二八年四月には「出石高校高橋定時制分校」が平田に設置され、昭和三〇年五月には、この分校のための校舎も新築・落成・向学の志に燃えた子女を集めて、この地域を拓く青年の育成を目指すことになったのである。

しかし、その後、交通事情の好転・経済事情の変化・農村の過疎化による生徒数の減少等の事情により、

より設備の整った本校で学ばせようということになり、資母分校は、昭和四一年三月、但東分校も四三年二月二七日最後の卒業生二七名を送った日廃止され、定時制発足二〇年の幕を閉じたが、その果たしてきた役割りは大きい。

新日本再建のための新教育の基本を定めた「教育基本法」にも明示されている通り、戦後の教育は「社会教育」に大きい期待がかけられており、この地域においても、昭和二五年から「公民館」が設置され、その活動が始まっている。

また、戦後の貧しい経済事情の中で発足した新教育を援けるために、経済援助的な役割りを果たしてきた、各学校の「教育後援会」が、研修的なねがいをもった「育友会」に変わるようになって、「父親学級」「母親学級」「幼児教育学級」「おじいちゃん・おばあちゃん学級」「孫育て学級」というような名前で開催されるようになった。

婦人会の研修活動・地域社会への大きい寄与と共に、老人会の自主的な研修活動が今日のように大きく力強く育ってきたことは、戦前では予想もされなかったことであろう。

3、学校給食・その他

この地域の給食は、はじめ、冬期間の味噌汁給食として始まったようで、記録の上に現われたものとしては、体育・保健教育について、はやくから力を入れていた久畑尋常高等小学校が、昭和一二年一月に始めている。唐川は昭和一四年一月に始めている。資母地区ではやいのは赤花校で、「昭和一七年一月一六日本日ヨリ三月上旬マデ学校給食実施味噌野菜ハ現品寄附」と記録している。

その後、昭和三四年から脱脂粉乳によるミルク給食が開始され、これと併行して、学校によっては味噌汁給食を再開したところもある。(例・中藤校)

これが、昭和三九年六月一日、但東町中小学校一斉に正式にミルク給食を行うことになり、国庫より五万円、但東町より五万円の施設補助費を受けて設備を整え、この実施に当たるのである。

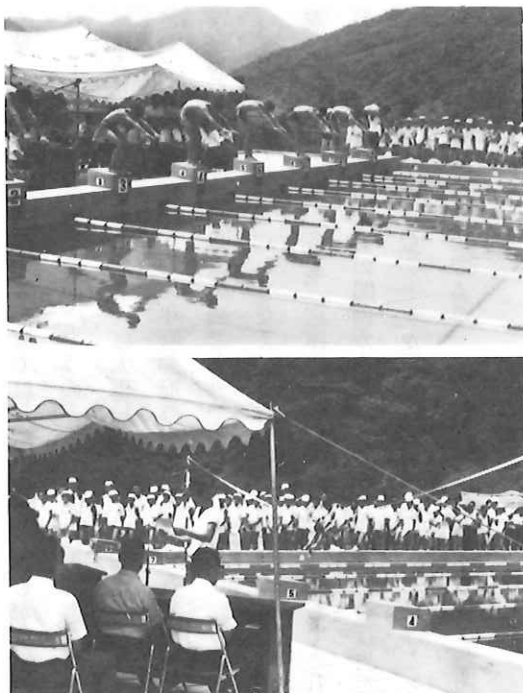
これは、更に完全給食の要望に昂まり、研究の結果、センター方式による完全給食を実施することとなり、出合に給食センターを建設し、昭和四四年九月二六日始めてこれが実施されることになったのである。

この地域の学校が、はやくから体育に力を注いできたことは既に見てきたとおりであるが、海に遠く、狭い川しかもたないこの地域では、泳げない子どもが多いのは当然であった。山村に生まれても、泳げるようにだけはしでやりたいというのが、教師や親の切実なねがいであった。

そういうねがいから、例えば太田校では、大正一二年八月、五日間に亘って天の橋立に臨海学校を開設しているし、中藤校は、この年京都府与謝郡府中にこれを開設している。おなじ年、相田校は氣比の浜に臨海学校を開いてきたのは既述のとおりである。

その後、永らくこれもとだえていたようであるが、戦後、昭和二七年頃から、資母地区では、資母連合育友会の行事として、各夏、宮津・天の橋立方面に連続してこれを開いている。しかし、参加も高学年に限られるし、経費や引率者の関係からも日数が限られることは当然である。

こういうことからプールがほしいというねがいはほんとうに強いものがあつた。そしてこれは、遂に、次のように実現したのである。(次頁写真は但東中学プール開き)



4、過疎化の進行と学校統合

先に述べたように、この地域の学校は、この地域の未来をきり拓いていってくれるような人間の育成を目ざして、恵まれない条件の中で、ひたすらにその実践をおし進めてきた。

が、高度経済成長を目ざす国の経済政策は、急速に人口の都市集中化を進めることになり、都市人口の過疎化現象を生みだし、逆に農山村人口の過疎化を推し進めることになった。殊に、若い人たちの都市への進出は、当然、児童数の急速な減少現象となり、学級定員を下げても複式学級・複々式学級の出現が避けられない現象となってきた。

合橋小学校 昭和四八年七月一三日

(二五^ノ五^ノ五^ノス 二三七・五²m)

高橋小学校 昭和四七年七月一〇日

(同 右)

資母小学校 昭和四九年七月一二日

(同 右)

但東中学校 昭和四五年七月二三日

(二五^ノ八^ノス 四二五²m)

資母中学校 昭和四二年七月一七日

(同 右)

昭和三〇年九月三〇日・合橋村・高橋村・資母村が合併、新しく但東町として出発するようになってからも、この過疎化をくいとめることができず、一〇幼稚園・一〇小学校・二分校・三中学校をかかえ、このままでは十分な教育を施すことのできる教育条件を整備することは困難であるということになり、学校統合の問題が切実な課題となってきた。そして、各局面における真剣な研究・協議が繰り返され、統合に踏み切ることになり、資母地域における中藤・赤花・太田・資母の四小学校は、資母小学校の校舎を校舎として資母小学校とし、高橋地域における平田・久畑の兩小学校及び薬王寺分校を、高橋中学校校舎を校舎として高橋小学校とし、合橋地域唐川・相田・河本・矢根の四小学校を統合し、合橋中学校校舎を校舎として合橋小学校とし、各小学校に付設されていた幼稚園も、新しい統合小学校に併設されることになったのである。

中学校は、高橋中学・合橋中学を一年間の名目統合の末、出合に新築校舎を校舎とし但東中学校とし、資母中学のみ、時期到来まで当分資母中学校として存続することになったわけである。

教育問題は、但東町の未来に係わる問題であるだけに、統合による通学距離の延長に伴う通学バス問題を含む通学費補助問題をはじめ、さまざまな問題をなお数多く持っているわけであるが、当局も、給食の問題、プール設置問題等々、教育条件の整備に努めてきたわけであり、各学校もそれぞれ、町民の期待に応え、但東町の未来を創る者の育成にねがいをこめて、実践をおし進めているわけである。

五、町内各種団体等の設立史と現状

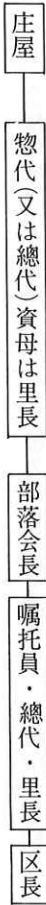
1、区 長 会

町制以来、四二部落各地域（一〇数世帯以上一〇〇世帯前後に至る）に大小の差はあつても、これをまとめる区長の職務は複雑多面になつてきた。しかし「区長」「区議会」としての自治組織を町一体として作つたのは、昭和三十七年一月からであり、それまでは町招集の「区長会議」は開かれても、自主組織としての「区議会」は存在しなかつた。

一体、近世以降、現在の大字すなわち「××村」として自然村が存在していたところは庄屋・年寄・百姓代を村方三役といい、庄屋は関東地方では名主ともいい、現在の町村長又は里長の立場だったが、その威権は遠く及ぶべくもない大きなものであつた、といわれている。（資母村誌二八五頁）

ここで近世の自治組織と現在のそれとを、比較詳説する紙数はないが、明治以来一〇〇年間をみれば、その職名はつぎのように大別することができよう。

明治以前 明治以降昭和初期まで 戦時中 戦後 合併後



右のような変遷がみられるが、職務内容には、本町にみる限り大きな変化はなかつたといえよう。その結果、町行財政の円滑な運営と進展に寄与しようとする一面と、町と町民間の意志の疎通を図り行政の推進に協力を求められる一面とをもち、両面の立場から区長間相互の親睦を図る目的で区長会が構成された。

すなわち「区長会規約」全文一四条は(一)町行財政に関する諸般の調査、連絡事項について町の意向を住民に徹底し円滑な運営を図る(二)住民の意向をよく町長に伝え民主的な町政の確立に協力する(三)区に共通する事項の意見を交換し区政の改善向上を図る(四)区長間の親睦を図る(五)その他(六)会長・副会長二・理事八を置き任

期一年とし(七)会議は總會四二人・理事会(理事以上)一人としこんにちに至り、上部団体としては兵庫県自治会連合会に加入している。創立第一年の役員はつぎのとおりであつた。(会長は旧三村輪番制とする) 会長・如布上田義孝・副会長矢根大石元太郎大河内桑垣吉之助・理事河本広瀬隆夫小谷宮嶋藤一唐川植田利雄正法寺森友幸男久畑小山精吾中藤岩破道彦奥赤小西清規太田谷協啓一。

また昭和五年の役員はつぎのとおりである。
会長・久畑中島一夫・副会長佐々木多根外朗畑山今井昭三・理事三原近本勇河本岡本伊三次矢根大石徳正久畑岡村晴夫平田水谷勝三奥藤出水利幸奥赤小西喜八郎木村藤原哲。
なお区長のもとにつきの役員をおき、各分担の運営にあたり、各自治の向上改善を期している。

部落内役員

町依頼役員

副区長

農林振興委員(農事部長)

評議員(若干名)

納税協力委員

会計

衛生部長

その他

交通部長

社会体育補助指導委員

2、商 工 会

但東町商工会は旧三村の商工会が合併して、昭和三三年から新しく任意組合として発足した。この年の一月合橋商工会から、大石元太郎・渋谷清志・斉藤寿栄雄の代表が、高橋商工会から浅田太左衛門・小山一彦・

小山正巳・浅田一正の代表が、資母商工会から、加藤 勉・上田義孝・堀丑之助の各代表が、また資母絹織物工業組合から古川覚一郎・渋谷小太郎・渡辺光司の各代表が集って、中小企業体新編成について協議し、新しい会則原案を審議し、他町村の状況等について話し合い、新団体の加入申込を取まとめる事とした。

二月一日但東町商工会創立代議員総会を開催、新会則案を承認、会則二七条による次の二五人が代議員に選ばれた。

○合橋地区商工会

大石元太郎 金久 三郎 家城森次郎 渋谷 清志 斉藤壽栄雄

○高橋地区商工会

福田三木太郎 小山 正巳 堀井 治雄 石坪 実夫 小山 一彦

○資母地区商工会

加藤 勉 上田 義孝 堀三右衛門 堀 丑之助 山本 真澄

○機業部

渋谷小太郎 古川覚一郎 渡邊 貫蔵 藤田 長治 渡邊惣太郎 渡邊 秀治 渡辺 時男
水口 光好 橋本 二夫 上田嘉一郎

この総会には町長代理の宮嶋藤一助役のほか永井町議会議長、山田高橋農協組合長等の祝辞があり、加藤 勉結成準備委員長の挨拶ののち、次の議事に入った。

一、経過報告第一回会合の経過を小山（一）代議員から報告した。